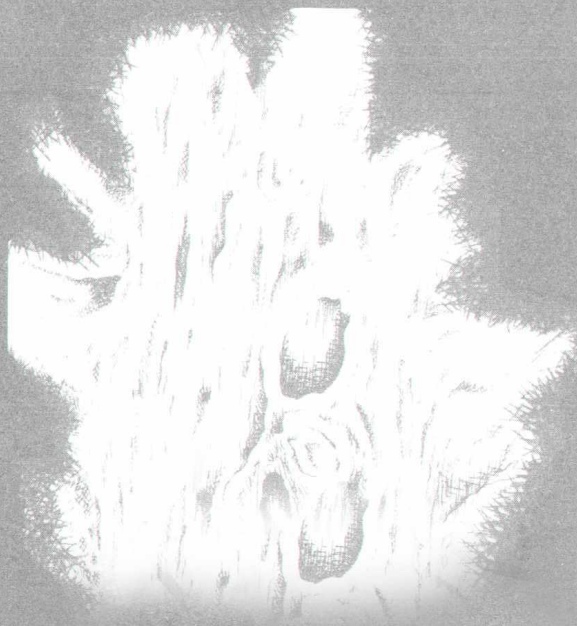


怪しみ 高橋たか子



新潮社

怪しみ 高橋たか子



新潮社版

怪しみ

定価 九八〇円

昭和五十六年 三月十五日発行
昭和五十六年 七月十日二刷

著 者 高 橋 たか子

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式会社 新潮社



東京都新宿区矢来町七十一番地
電話 東京(26)五一二(業務)
東京(26)五四二(編集)
振替 東京四八〇八 一六二
印刷 株式会社 金羊社
製本 神田加藤製本

私丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

怪しみ

5

招き

47

顕われ

97

誘い

147

あとがき

197

裝
畫
生
野
一
樹

怪

し

み

— 高橋たか子創作集

怪
し
み

車内の騒々しさは一段と強まってきた。音の源は、通路をへだてた反対側の、斜め後ろである。始発駅に停車していた時は、人がまばらで閑散としていて、話し声も笑い声もなく静まりかえっていたのであった。グリーン車特有の、人間らしさの稀薄な、どこか真空のような空気がびいんと張りつめていて、そこに体の形をすべりこませるふうにして腰をおろした私は、そっとその場に自分を憩わせていた。だが発車間際に一家族が入ってきたのだ。薄い氷をあらあらしく踏んでくるような音に、私は振りかえった。私と同年輩の三十代の夫婦と、六、七歳の男の子とが、足早に通路を歩いてきた。男は三歳くらいの女の子を腕にかかえ、あいているほうの手で、物のいっぱい詰った紙袋をさげていた。女は片手にハンドバッグ、もう一方の手に、最近人がぎそって買うというパリ製のカバンのイミテーションらしいものを持っている。男の子も両手に紙袋をさげている。薄い氷をあらあらしく踏むようにと私を感じただけで、むしろ彼らは物馴れない様子で、ひそひそ声で座席番号を口にしあい、いつまでも確かめあっていた。そして、ロマンス・シートの一つを、がたあんと大きな音をたてて向き合わせた。その音だけ、ひどくふてぶてしかった。

彼らのうちにぎわめきが立ちはじめたのは、列車がうごきだして一駅目を過ぎた頃からだった。よその家に連れていかれた幼児が最初は行儀よくきちんとしているけれども、徐々に徐々に寡黙さを脱いでいって、赤い内臓のような声をたて、そのうちにすっかり自分をあらわしてしまふ具合と、それはよく似ていた。

その四人は、いわゆる家族を形成する父、母、長男、長女……といった秩序をあらわすものでは全然なくて、四人とも同質にみえた。そして、そろって、列車の進行に比例して旅行のうれしさに浮きたってくるのが、傍目にも見てとれた。窓を右に左にと見たり、身から離すのを恐れてでもいるように網棚にはあげずに足許にずらりと並べた荷物のなかから、三、四冊のマンガの本をとりだしたり、カメラを出したり入れたり、座席を倒してみたり立ててみたりしている。

そうした動作が次第に高まるぎわめきをつくっていく一方、動作にともなう声がだんだん大胆になっていく。徐々に徐々に彼らは自分たちに成っていく。

いまや辺りをはばかりぬ喚声がたてられていた。彼らはトランプを始めたのであった。この車内のその座席のところだけ、異質なにぎわいの細胞が増殖していくようである。梅雨時の、山野へむかう列車には、乗客もちらほらで、そんな乗客が彼ら一家の茶の間に臨席させられている、といった恰好である。

みんなどう思っているのだろうか？

と、私は車内を見まわしてみる。けれども人々はそれぞれ、ひっそりと雑誌を読んでいたりを閉じていたり、苛立つ顔をしている者はない。

男と男の子が組になつてゐる間、手持無沙汰なのだろう、女は旅行案内書を声高に読みだした。車内の人々に聞かせてでもゐるのか。その声で、彼らの行先がどうやら私と同じK駅らしいと知つた私は、目の前がまっくらになるほどうんざりしてきた。これからずっと三時間ほどの状況から逃れられないのだ。

車掌が検札にまわつてきたので、私は期待をかけた。けれども彼は礼儀正しく彼らに会釈し、次に私のところに来、それから次の席へと移つていくだけである。現に彼らは、車掌がいる間だけ妙に大人しくなつていた。そして、車掌が車輛を通りすぎて、後ろ手で閉めたドアのむこうに消えてしまうと、みるみる本能のように膨脹してきた。

逆に私は、暗く暗くなつていく。馴れた気分ではある。自分の命が他人の命によつて圧迫される時にならず起こる。誰かが私のそばで猛々しく命をあらわしているために、私はその分だけ命を凹ませられて、空虚になる。その分だけ死んでいる。

けれどもこんな被害は、自分勝手なものなのかもしれない。明らかにすることのできないぐいのものなのかもしれない。

みなさん、あんな声が車内にのさばつていいものでしょうか。

と、私が他の人々に言ったとしても、

あんな声？ ああ、あの人たち楽しそうじゃありませんか。

といった答えが、人々から返ってくるのかもしれない。

私は席を代わることを思いついた。網棚の上の旅行カバンと上着をおろし、ずっと前のほうの

空席まで歩いて行って、席をとった。そうして坐っていると、後部に近い彼らの席から伝わってくる声は、ぐんと弱められて届くのがわかった。どうしてもっと早く、席を代わることを思いつかなかったのか、と思い、やっと自分を取りもどして、のびのびと体をひろげた。自分の命を取りもどした気分だった。

平穩さはしばらくのことだった。彼らはトランプをやめて、別な遊びを思いついたのであった。旅行先でするために持ってきたのだらう、バドミントンのあの羽根のついた球を使って、車内の通路でキャッチ・ボールを始めたのだ。そのために、せっかく離れた席にいた私の、すぐ近くに男が立つことになり、あちらのほうに男の子が立って、二人で球を投げあうのである。さすがにこれは私の自分勝手な被害ではなくなってきた。なぜなら、球が人々の頭をかすめたりするからである。

けれどもなぜか誰一人、文句を言いだす者はなかった。みんなの沈黙はまるで悪夢のような具合である。

男はジーンズの上下を着ていて、首に赤い縞のはいったスカーフをのぞかせている。男物の週刊誌のファッションのページから脱け出してきたようないでたちだが、顔と服とがちぐはぐである。

私は目をとじた。けれども、すぐわきで球を投げたり受けたりする男の、力んだ動きの余波や埃っぽい靴の臭いが伝わってくる。トランプの時のように大きな声はあがらなくなったが、投げあう羽根が大きく行き来するので、彼らの楽しみが車輛の長さを占領してしまっている。目をと

じている私の中をひっきりなしに羽根が行き来し、私の中で他人たちがキャッチ・ボールをしているという圧迫された気分になる。

この離れた席まで逃げてきた私を、何かがここまで追跡してきたのだ。

こんなことがいままでもよくあった。意識しはじめると、かならずそれに輪をかけて、私を追跡してくる現象が続出する。意識しなければよかったのに、場を作ってしまったのだろう。

やがてキャッチ・ボールが終り、次は散歩が始まった。

女が女の子の片手をとって、通路を歩きだしたのである。後部のほうからゆるゆるとやってくる。私に近づいてくるわけではないが、私は私に近づいてくると感じてしまう。わきを通りすぎると、女は視野のなかに入ってきた。男と同じようにジーンズの上下を着ていて、首のところにオレンジ色のスカーフをのぞかせ、目のまわりでは、つけ睫毛が大きな蠅のようにふるえている。三歳くらいの女の子はロング・ドレスを着せられていた。この一組は前のドアのところに達すると、くるりと向きを変え、また後部へむけてゆるゆると歩きます。列車が揺れると、高いハイヒールの上で女の体がぐらつく。二人は私のわきを通りすぎて、視野の外へ出ていった。男と女の子はどういうわけかひっそりと静まりかえってしまっている。これほど憎んでいる彼らに、まるで執着しているかのように、私は振りかえって見ずにはいられなかった。ずっと後部のほうに、男と男の子がマンガに読み耽っているらしいのを見てとれた。そのことでいっそう思いが募った。女と女の子の散歩はずっと続行されていて、またこちらへ歩いてくる。さっき女は女の子の手を引いていたが、今度は一歩先をファッション・ショーみたいな恰好ですすんでくる。女の子は

よろけながら従ってくる。二人は私を越えて前のドアまで行き、さっきと同じくくると向きを変えて、また私の視野のなかを、今度は女の子が先に歩いてくる。カーヴの多いところにさしかかっているらしくて、先刻から汽車が時たま強く揺れ、そのたびに女と女の子はよろよろする。女の子の体はぐらりと傾き、すぐ反対側にぐらりと傾いたので、平衡を保った。そしてまた歩いてくる。

私は女の子の足もとを強く見つめていた。そんな凝視に射すくめられたふうに、次にまた列車が揺れると、女の子は足をじぐざぐともつれさせた。

あ、倒れる。

と、私は思わず手をさしだそうとした。

けれども私は別なことを口にしていた。

「倒れろ」

それはたちまち列車の震動音に消されてしまつて、誰にも聞かれなかったらしかった。

その時、私の中から何かがふいと出てくる感覚を、私は持った。粘液にくるまれたようにぬるりとした通過感覚の後、それはどこか人格めいた大きさになった。

女の子は前に傾いたかと思うと、私より一つ前の座席の腕に、真向から顔をぶつつけ、通路にもんどり打って倒れた。宙に目をもちあげて歩いていた女は、悲鳴が上がるまで気づかなかった。

その悲鳴たるや、どこか暗い淵に溺れかけて叫んでいる大勢の人々の声を吸いあげているかのように、狂暴な命に充ち充ちていて、女に抱きあげられた女の子が後部の席のほうへもどってい

くにつれて、そこに含まれるきりきりした軋み音は薄らいだが、声の大きな流れそのものは車内いっぱいにひろがりわたっていく。そして、それにじいっと耳を澄まして聴きいつているのは、私というより、むしろ私から出てすぐそばに浮遊している、なにか人格みtainなものなのであった。自分が二重になり大きく厚ぼったくなって、ここにいるという気がした。

私は悲鳴よりも自分の変化のほうに、急激に注意力をうばわれていった。そんな気分のなかで十五、六歳の頃のことか思い出されてきた。

それは私がおばさんと呼んでいた、私の親よりもっと年上の女の人のことなのである。おばさんは私の家の近くに夫と二人で暮らしていた。子供がないせいか私を自分の子供みたいにかわいがっていた。全然人なつこいところのない私だったが、おばさんだけは全幅の信頼みtainもので結ばれていて、いつも自分の思うことをあけすけに喋っていた。

或る日、いつもそうするように私は学校の帰途におばさんの家のベルを押した。黒い板塀にこまれたその平屋の家は、塀のむこうに埋めこまれたふうに、すこし陰気な印象があった。私は門前に立つ時はいつも、喋ろうと思うことを小さな小包みtainにして胸のうちに持っていた。なんとなく遊びにいくのではなく、かならず話の内容があるのであった。とはいっても、その年頃の女学生の誰にでもあるような、親には言わないことで、親ぐらいの年齢の人なら聴いてくれるだろうと思えること、といったものにすぎなかった。

はいともはいとも聞える、くぐもった声が家のなかで発せられると、それから、びたと物音の

途絶える数瞬があり、その間、私はいつも、おばさんがたった一人で座敷のまん中で瞑想していた姿勢から、すうっと立ち上り、次の行動へと自分を切りかえるために、一回、二回、三回と、深呼吸している姿を思い浮かべるのが習慣になっていた。もちろんそんな想像にはなんの根拠もなかった。

玄関の引戸があげられて、すこし白髪のはじめたおばさんの頭があらわれる。

「あらあら、揺子ちゃん」

私にたいする最初の言葉はいつもそれなのであった。人のよさそうな丸い目をひどく細める表情が、それに伴う。

あそこの夫婦は変わった生活をしているという噂が、近所で始終ささやかれていた。夫婦だけれども夫婦でなくて、それでも別れもせずにいっしょにいることについて、いろいろ詮索がましい理由があげられていた。

おばさんのさびしさの洞穴に、私という女学生が入りこむと、洞穴が犬の寝床のように温もるらしいことだけは、私にもわかっていた。とはいっても、おばさんは何ひとつ、おじさんに関する愚痴話はしなかったし、さびしそうなところを片鱗も見せなかった。

身だしなみと同じくらいに居間はいつもきれいに整頓されていた。それに、いつ客がきてもかならず準備されているらしい菓子をおばさんは紫檀の机の上へ持ってくる。

「おばさん、いま何をしたの？」

と、私は訊ねる。